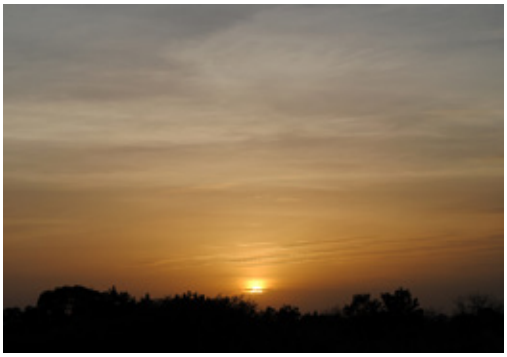
受け継がれるもの

祭日の夕暮れ

その日は朝からお祭騒ぎだった。クリスマスは村びとが心待ちにする祭のひとつだ。教会の庭では信者のカンパで用意されたモロコシ酒が無限のように振る舞われる。その酒と、やまない楽の音に胸を躍らせて集まるのは、色とりどりに着飾った男女だ。男たちが奏でる何種類もの太鼓や木琴が生み出す音のうねりに身をまかせ、輪になった女たちが複雑なステップを繰り出しながら踊り、歌う姿は見ているだけでも楽しい。というのはまだ恥と遠慮のあった2008年の最初の調査で思ったこと。時は2013年、調査も6回目となればすこし違う。酒を交わして冗談に笑い、誘いに応えて踊りの輪に飛び込む。女たちと一緒に砂埃を巻き上げながらリズムを追いかけ、腹の底から声を出して歌っていると、日頃の悩みなんてどこかにふきとんでしまう。足を絡ませながら輪の列についていく私を振り返る女たちの顔は底抜けに明るく輝き、みんなが同じ気持ちでいることを知って心はさらに高揚する。踊りは一層熱を帯び、加速される演奏と共に砂埃は一段と高く昇っていく。

そうしてひとしきり祭を堪能し、心地よい気だるさを感じながら私は家路についた。日中、容赦なく大地を焦がしていた太陽は、空を優しい色に変えながら地平線の向こうに沈んでいく。ふと気付くと、鼓膜を揺らしていた太鼓の音は、四方八方から聞こえてくる悲痛な泣き声に変わっていた。「昨日一緒にモロコシ酒を飲んだのに！」と泣き叫ぶ声。さっきまでのにぎわいが嘘のように消え、今では村中が泣いている。なにが起きたのだろうと思っていると、ちょうど友人が通りかかった。村ではこうして人づてに、知らせは瞬時に伝わっていく。不安な面持ちで尋ねる私に、ある人が今、この世を去ったと彼はつげた。それを知った者たちが一路、感情もあらわに故人の家を目指していた。



写真①村の夕暮れ

モロコシ酒

ここは西アフリカのブルキナファソ、首都から約250km北西にある農村だ。村にはブワという農耕民が住む。私はこの村での調査中、とある家族の一員として受け入れてもらい、「娘」として暮らしていた。亡くなったのは、その家のお母さんの叔母に当たる人だった。「娘」の私にとっては祖母の妹、つまり「大叔母」ということになる。

大叔母は、酒造りをなりわいとしていた。酒造りは女の仕事で、彼女たちがお金を稼ぐ手段のひとつでもある。酒とは、モロコシというイネ科の穀物と水を原料として造るモロコシ酒のことだ。2日間かまどにつきっきりで、煮たり、こしたりして、酵母を入れたら3日目の朝に完成する。酒は黄味がかった橙色をしていて、すこしすっぱい。女こどもが好むのは微炭酸で甘い、朝一番のできたての酒だ。午後になると発酵が進んで甘さが消え、アルコールの強さが目立つようになる。こちらは真の酒好きが好むと言われる。ブワはモロコシ酒をこよなく愛する民族として名高い。村にたくさんある酒場をはしごして、味の違いやおしゃべりを楽しむのが村びとの娯楽だ。モロコシ酒は冠婚葬祭の時にも活躍する重要な飲み物でもある。

大叔母は、クリスマスに合わせて酒を造っていた。訃報を聞いて葬式に駆けつけたお母さんは、大叔母が遺した酒を売ったという。お母さんの心中を思うと胸がつまった。そもそも大叔母はどうして亡くなったのか。―毒殺された、という噂だ。毒殺は珍しいことではない。モロコシ酒を飲む器にこっそり毒を盛るのがよくある手口だという。今回、警察の検証はなかった。真相は闇の中だ。

弔問

大叔母が急逝した翌朝、埋葬がいつおこなわれたのかは自宅にいてもわかった。大地が唸るような泣き声の束を、風が運んできたのだ。慌てて妹たちと庭に出て背伸びをし、土塀の遠く向こうにある声の出所を見やった。胸が痛んだ。残念ながら私は大叔母と深い交流はなかったが、近い親族だし、大叔母の息子夫婦とは親しかったので、お悔やみに行くことにした。

大叔母の家に着くと、敷地の外に男たちが座っていた。50人近い。他のアフリカの民族と同様、ブワ社会でも挨拶はとても重要である。ひとりひとりと手を握り、目を見ながら挨拶をするのは当然のことだ。大仕事に一瞬ひるんだが、覚悟を決めると順番に挨拶をしていった。やっと入った敷地の中央には、モロコシ酒造り用のかまどが備えられ、右手には大叔母の家、左手には息子

夫婦の家がある。女たちは敷地を囲む土塀に沿って置かれた椅子に、ところ狭しと座っていた。村外からも弔問客は来ているようだ。先ほどと同じように挨拶を済ませると、すこし身を硬くして近親者が集う息子夫婦の家に入った。私のお悔やみに「ありがとう」と相づちを打つ故人の義理の娘の頬は涙に濡れ、目は赤く腫れあがっていた。大切な人を失ったのだ。

挨拶が終わると、私は従兄の妻の隣に腰を降ろした。いつも棘のある冗談で私をからかう彼女の顔は暗く沈み、涙は乾いていなかった。かけることばもなかった。

敷地の入口からは、お悔やみに訪れた人たちが泣きながら入ってくる。その声の大きさに驚いてしまうのは私の性格のせいか、日本育ちのせいか。日本で参列した大切な人の葬儀ではできるだけ涙をこらえたし、他の人もそうしていたようにみえた。ここではその逆で、感情を一切隠さず、すべてをあらわにしているかのようだ。

間もなくモロコシ酒が振る舞われ始めた。ひょうたんで作ったお椀が何個か配られ、モロコシ酒が注がれていく。飲み終わると注ぎ手にお椀を返す。注ぎ手はそれを素早くバケツの水ですすぎ、次の者に配っては酒を注いでいく。腰かけた女たちは頬を濡らし、ぼんやりとそれを見つめる。

想いがつなぐもの

会場には、新たに到着した弔問客の泣き声が絶え間なく響き渡る。その度に時間が巻き戻されて、悲しみが始めから再生されるかのようだ。永遠に上がることのできない悲しみの海に沈んでいる。ほとんど交流のなかった私さえこんな気持ちになるのなら、親交の深かった者たちの悲しみはどれほどだろう。みんなでモロコシ酒を飲んでいると、一緒に同じ海にいるような気がしてくる。弔問客は絶えず、泣き声はやまない。大叔母が生前いかに慕われていたのかを想像させた。

永遠と続くような暗い場所で、唯一光を射してくれたのはこどもだった。葬式にはそぐわない無邪気なおしゃべりや行動は、暗い海の底と現実とをつないでくれる細い命綱のようだ。そこにいるだけで明るく、根拠のない希望を感じさせてくれる若い命。大切な人を失う悲しみは、若い命、新しい命にすがることでしか越えていけないように思えた。先人たちも、故人への想いを託しながら命をつないできてくれたのだろうか。

２周目のモロコシ酒を飲み終えたところで、従兄の妻の手招きに導かれて隣の家へ行った。そこでは目を腫らした女たちが、汗を流して弔問客のために食事を作っていた。お母さんにねぎらいのことばをかけると、「昨日病院に行って、

１日で死んじゃった。１日で。こんなことがあっていいのか」とつぶやいた。涙と定型の挨拶ばかりの葬式で、やっと聞けた誰かの本音だった。

５日目の海

お母さんは連日、手伝いを兼ねて葬式に通った。３日目は、「村にはモロコシ酒がない。外の村から来た年配の女性に振る舞う分もなかった」と嘆いた。酒ができるまでには３日かかる。祭と葬式があったから、酒を造ることができた女性がほとんどいなかったのだろう。お母さんが「明日は葬式に顔を出しなさい」と私に言ったのは、４日目の夜のことだった。末の妹によれば、「今日はハドコラ（筆者の名前）も来るかなと思って待ってたけど、来なかった」とお母さんが言っていたという。１度行ったきりになってしまっていた。翌日、調査を終えた私は重い足取りで葬式に向かった。

着いてみると数日前とは様相が違う。交わされる雑談には冗談さえ混ざり、女たちの顔は別人のように明るかった。「こないだ酔っぱらった時に夫のこと叩いちゃったわ！」なんて言いながら豪快に笑う声も聞こえてくる。公然と農作業や

写真②大叔母の家とモロコシ酒造り用のかまど。お母さん（左から２番目）と従兄の妻（右から２番目）

家事を休み、酒やおしゃべりを楽しんでいるような非日常的な空間が広がっていた。悲しみはそれぞれの心にひっそりと居場所を得たのか、みんなで沈んだ悲しみの海は、もうどこにもなかった。

とにかくモロコシ酒をたらふく飲み、たくさんおしゃべりをして大叔母の家を後にした。家に着くまでの間、お母さんは葬式で起きたもめごとに対してつばを飛ばして怒っていた。あぁ、いつものお母さんだ。故人を悼み、遺された者同士で一緒に時間を過ごすうちに笑いが生まれ、関わり合って怒り、なだらかに感情を取り戻しながら日常に帰っていくのかもしれない。お母さんが葬式に出たのはこの日までだった。翌朝、彼女は暗いうちから野菜を収穫して娘を市場へと送り出すと、この数日でたまりにたまった大家族の洗濯物を１日がかりで片づけた。

受け継がれるもの

最後の現地調査から帰国して３年が経った。村のお父さんからメールが入ったのは去年の末、2016年の暮れのことだ。私が村で家族と同じぐらいお世話になったイディアおばちゃんが、この世を去ったという知らせだった。実感がわかなかった。

この原稿を書きながら、不謹慎ではあるが、亡くなったときに大叔母のように多くの弔問客が葬式に訪れる人望のある人は誰だろうと考えていたら、ふとイディアおばちゃんの顔が浮かんだ。彼女の葬式には、それはたくさんの人が集まっただろう。葬式をイメージした途端、彼女の死が私の中で形をとり、視界がぼやけていった。村の家族とうまくいかなかった時、不安な時、ふらっと訪れた私に「座れば」と声をかけ、いつも温かく迎えてくれた。彼女が無類の酒好きなこと、若い男も照れる過激な下ネタをとばすこと、金の亡者と裏口を叩かれるほど商売上手なことを知る者は、私のそばにいない。彼女を失った意味が正確にわかる人たちと一緒に、彼女の死を、寸分余すことなく分かち合いたかった。モロコシ酒を片手に沈んだあの海は、もうどこにもない。

愛しい者たちの生は、確かに私の中に息づいている。かれらの世界を彩ったすべての人を通じて、生は受け継がれていく。ひとりの人間の中には、命をつないだ先人の命、先人が出逢った者たちの命、そして自分自身が出逢った者たちの命が詰まっているのだろう。私たちはひとりで、幾千もの命を生きている。それもたくさんの想いが託された命を。私の息子はもうすぐ２歳を迎える。胸の奥深くから湧いてくる、あなたの子々孫々まで愛しているよ、という想いは、私ひとりから生まれたものではないのかもしれない。

神代ちひろ